日本古代通史・連載第 22 回

後期・邪馬台国の時代①
～英彦山と京都平野～

河村哲夫

【これまで季刊「古代史ネット」に連載された河村哲夫氏の論文】

季刊「古代史ネット」	日本古代通史・連載回数	テーマ
創刊号(2020 年 12 月)	第 1 回【プロローグ】	【Ⅰ】卑弥呼の鏡 【Ⅱ】天照大神の鏡
第 2 号(2021 年 3 月)	第 2 回【奴国の時代①】	【Ⅰ】邪馬台国前史としての奴国 【Ⅱ】高天原の神々
第 3 号(2021 年 6 月)	第 3 回【奴国の時代②】	朝鮮半島南部の倭人の痕跡
	第 4 回【奴国の時代③】	北部九州のクニグニ
第 4 号(2021 年 9 月)	第 5 回【奴国の時代④】	奴国の神々
第 5 号(2021 年 12 月)	第 6 回【邪馬台国の時代①】	卑弥呼の登場
第 6 号(2022 年 3 月)	第 7 回【邪馬台国の時代②】	卑弥呼の外交①
第 7 号(2022 年 6 月)	第 8 回【邪馬台国の時代③】	卑弥呼の外交②
第 8 号(2022 年 9 月)	第 9 回【邪馬台国の時代④】	邪馬台国への道・三韓諸国
	第 10 回【邪馬台国の時代⑤】	邪馬台国への道・対馬と壱岐
第 9 号(2022 年 12 月)	第 11 回【邪馬台国の時代⑥】 第 12 回【邪馬台国の時代⑦】	末盧国と西海の島々 末盧国から伊都国へ
第 10 号(2023 年 3 月)	第 13 回【邪馬台国の時代⑧】	伊都国から奴国へ
第 11 号(2023 年 6 月)	第 14 回【邪馬台国の時代⑨】	奴国から不弥国へ
	第 15 回【邪馬台国の時代⑩】	夜須をゆく
	第 16 回【邪馬台国の時代⑪】	朝倉をゆく
	第 17 回【邪馬台国の時代⑫】	日田をゆく
第 12 号(2023 年 9 月)	第 18 回【邪馬台国の時代⑬】	投馬国は豊の国
	第 19 回【邪馬台国の時代⑭】	狗奴国は肥の国
	第 20 回【邪馬台国の時代⑮】	狗奴国と卑弥呼の死
	第 21 回【邪馬台国の時代⑯】	卑弥呼と台与
第 13 号(2023 年 12 月) 4 論文一挙掲載！	第 22 回【後期・邪馬台国の時代①】	英彦山と京都平野
	第 23 回【後期・邪馬台国の時代②】	神夏磯媛と豊比売命
	第 24 回【後期・邪馬台国の時代③】	英彦山と宗像
	第 25 回【後期・邪馬台国の時代④】	ニギハヤヒ

はじめに

前号において述べたように、卑弥呼の後継者である台与についての具体的な情報は、『魏志倭人伝』にもほとんど記されていない。

しかしながら、何度も述べたように、「台与＝投与(投馬)＝豊」とみれば、九州の豊の国(福岡県・大分県)方面に足場を置いた女王ではないかという推測が成り立つ。

くわえて、「卑弥呼＝天照大神」とすれば、「台与＝万幡豊秋津師比売命」という関係も成り立つ。

そうであるとすれば、中国の『魏志倭人伝』ではよくわからない台与の情報を、日本側の『日本書

紀』『古事記』の万幡豊秋津師比売命に関する情報によって補足説明することができる。

というより、『日本書紀』『古事記』などを主力エンジンとして、真正面から日本側の情報を発信することが可能となる。

そういう観点から、「第一部 奴国の時代」、「第二部 邪馬台国の時代」に引き続き、「第三部 後期・邪馬台国の時代」として、書き進めていきたい。

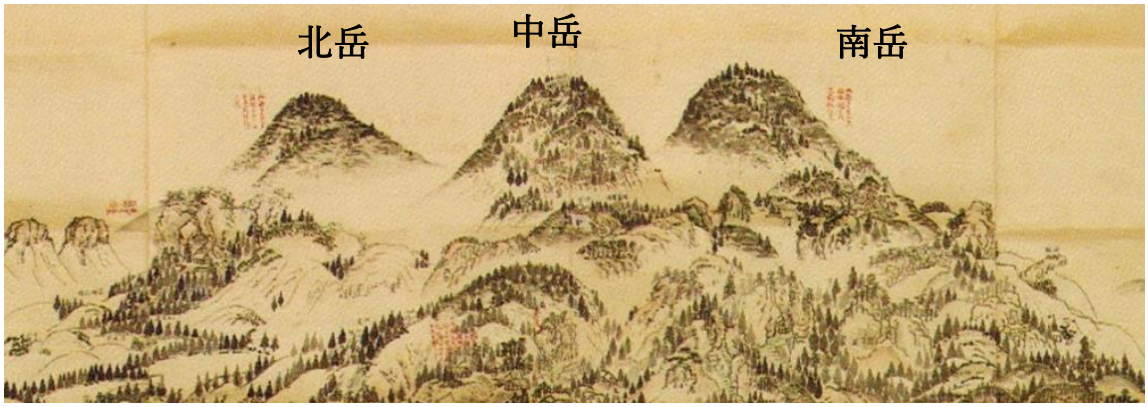
英彦山

英彦山は、古来、豊前国第一の霊山として崇められてきた。

福岡県田川郡添田町と大分県中津市(旧下毛郡山国町)の境にある山である。標高 1,199.6 メートル。

平安時代初期までは「日子山」と書かれたが、819 年(弘仁 10)嵯峨天皇の勅命により「彦山」と改められ、江戸時代の 1729 年(享保 14)に霊元天皇から「英」の一字を賜り、「英彦山」と改められた。

北岳・中岳・南岳から成り、中岳には英彦山神宮の上宮・中宮・下宮があり、主祭神として天照大神の長男とされる天忍穂耳命(あめのおしほみみのみこと)を祭っている。



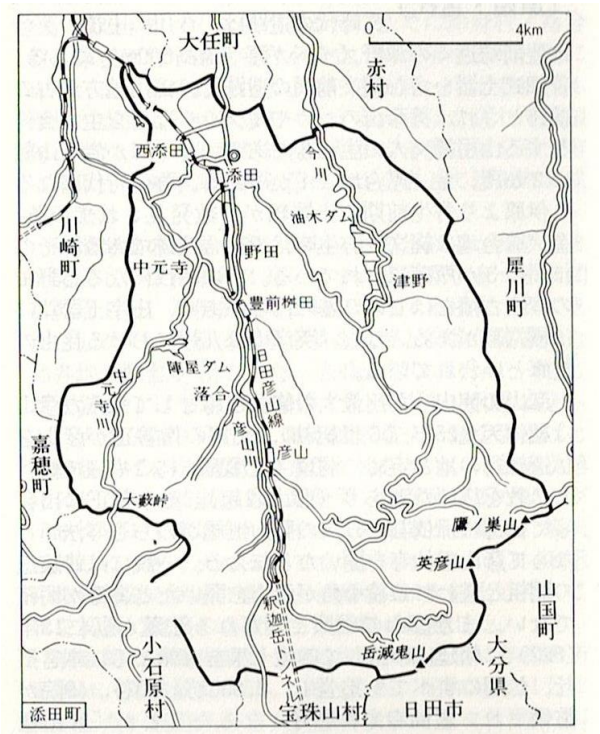
邪馬台国の卑弥呼の時代、天忍穂耳命はその名のとおり投馬国の長官の「耳」として赴任し、英彦山を拠点としていた可能性もあり得る。

国名	官名			
邪馬台	伊支馬	弥馬升	弥馬獲支	奴佳鞮
投馬	弥弥	弥弥那利		
不弥	多模	卑奴母離		
奴	兜馬觚	卑奴母離		
伊都	爾支	泄謨觚 柄渠觚		一大率
末盧				
一支	卑狗	卑奴母離		
対馬	卑狗	卑奴母離		

壱岐や対馬の長官は「卑狗(日子・彦)」と呼ばれたから、耳＝日子(彦)でもある。日子(彦)たる天忍穂耳命が拠点とする山として「日子の山」と呼ばれた可能性もあり得よう。

これまで述べてきたように、卑弥呼が女王であった時代の邪馬台国の拠点は、筑紫平野の一角の御笠郡・夜須郡・朝倉郡・日田郡のいずれかにあった可能性が高いとみている。

そして、西方から狗奴国の圧迫を受けて、卑弥呼が没したころには朝倉郡東部の旧杷木町あたりに拠点を置き、後継者の台与は筑紫平野東端の日田あたりに拠点を移した可能性が高いことについても、すでに述べたとおりである。日田と英彦山は、それこそ指呼の間にある。



上の地図は平成の大合併前のものである。日田のすぐ北側に英彦山が位置している。

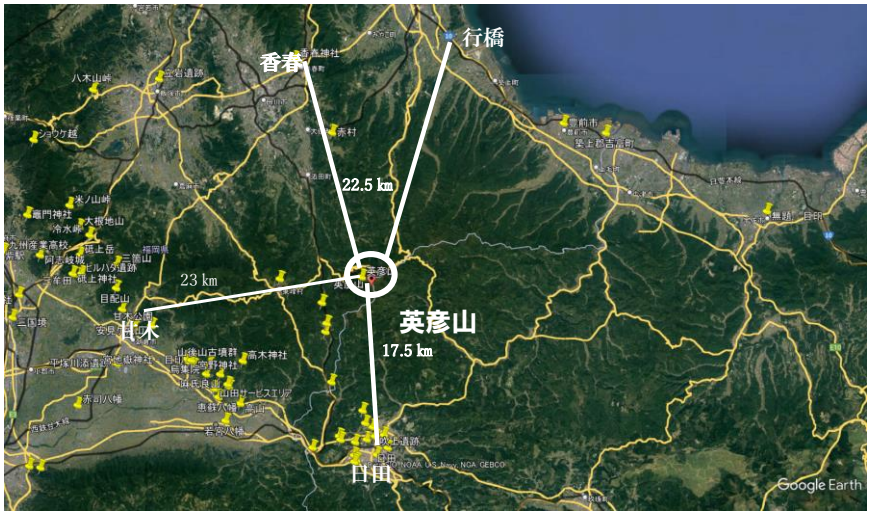
朝倉郡に属する小石原村と宝珠山村(現在の福岡県東峰村)からも、英彦山は間近に見える。下毛郡山国町(現在の大分県中津市)からも同様である。

そして、英彦山の位置する田川郡添田町を JR 日田彦山線が南北に縦断している。

添田町南部こそ釈迦岳トンネルが掘削されているが、それより以北は彦山川に沿って進み、大任町・川崎町・田川市・香春町などを経て、北九州市とつながっている。

また、彦山川をまっすぐ北に下れば、やがて遠賀川になり、飯塚・直方を経て響灘・洞海湾に到達する。これらのルートを古代人が見逃すはずがない。

台与が女王となった時代を「後期邪馬台国の時代」と呼ぶならば、これから述べるように、その拠点は、日田から英彦山あたりに移動し、その勢力圏は豊前あるいは遠賀川流域一帯に拡散していったであろう。



豊前海の御潮井採り

毎年 2 月末日(旧暦 1 月 26 日)に、英彦山の「松会(まつえ)祈年祭」(旧暦 2 月 13 日～15 日)の行事のために、英彦山から今川流域の九里八丁(39 キロ)の道を下り、行橋市沓尾の姥ヶ懐(うばがふところ)という海岸において潮水を汲み取る「御潮井採り」の神事が催される。

姥ヶ懐というのは奇妙な地名であるが、民俗学者であった柳田国男(1875～1962)は、『石神問答』に収録された山中共古(1850～1928)宛ての書簡のなかで、次のように言及しており、現代語訳で紹介すれば、

「姥ヶ懐という不思議な地名は、すぐにでも全国数十箇所を列挙することができます。姥はまた乳母や祖母とも書くことから、山懐【やまふところ・山々に囲まれた場所(筆者注)】)とも思われますが、本来は「姥の処」に由来すると考えております。すなわち、姥神を斎祀する場所という意味です」

と述べている。

柳田国男は「全国数十箇所」に分布すると指摘しているが、「奥四万十山の暮らし調査団」(代表武内文治氏)の調査などによると、高知県内に多数分布しているという。

下表のとおり、柳田国男の「全国数十箇所」と比較すれば、圧倒的多数を占めており、高知県を「姥ヶ懐」の発祥の地と考えてもよさそうである。

高知県内の姥ヶ懐

ウバガフツクロ（安芸郡東洋町野根）・姥母ヶ懐（安芸市下山）・姥懐（安芸市川北） 乳母ヶ懐（香南市夜須町千切）・乳母ヶ懐（香美市土佐山田町加茂）・姥ヶ懐（香美市土佐山田町平山） ウバガホトコロ（香美市香北町韮生野）・姥ガ懐（香美市物部町五王堂）・姥ヶ懐（高知市池） 姥ヶ懐（高知市介良）・ウバガフツクロ（高知市鏡柿ノ又）・ウバガフツクロ（仁淀川町土居） ウバガホトコロ（土佐市出間）・姥ヶ懐（土佐市波介）・姥懐（土佐市新居）・姥ヶ懐（日高村沖名） 姥カ懐（越知町横畠北）・姥カ懐（越知町宮地）・姥ヶ懐（高岡郡佐川町丙） ウバガフトコロ（高岡郡佐川町西山組）・姥ヶロ（高岡郡佐川町瑞應）・姥ヶ懐（高岡郡中土佐町久礼）ウバガホトコロ（黒潮町奥湊川）・姥ヶフトコロ（黒潮町入野）・ウハカフトコロ（黒潮町上田） ウバガフツクロ（四万十市奥鴨川）・乳母ヶ懐（四万十市伊才原）・ンバカホトコロ（四万十市安並） 姥フツクロ（土佐清水市布）・乳母懐（土佐清水市足摺岬）・姥ヶ懐（土佐清水市大浜） 姥ノフトコロ（宿毛市山奈町山田）

したがって、行橋市の姥ヶ懐についても、四国(高知)との海を介した交流に由来する可能性が高いが、それはあくまで地名に限ってのことであり、何ゆえこの場所において英彦山の御潮井採り神事がおこなわれるのかについては、別途考察すべき問題である。

行橋市沓尾の姥ヶ懐

おそらく、香尾海岸の姥ヶ懐は、もと豊前海における古代人の航海安全の祭祀ないし禊の場であったが、やがて英彦山の「御潮井採り」という神事に組み込まれたのであろう。

英彦山から行橋に下れば、船に乗って豊前海――周防灘に出ることができる。行橋に上陸すれば、英彦山に上ることができる。

ということは、英彦山から行橋に至る御潮井採りのコースそのものが、古代の交通路の記憶を留めているのであろう。

行橋から北東方向の山口県宇部市との距離は直線でわずか 30 キロ。瀬戸内海を航行して吉備(岡山・広島など)や四国各地に容易に渡ることができる。北方 25 キロの関門海峡を越えれば、響灘・玄界灘・日本海へ出ることができる。豊前海・周防灘を南下すれば、四国地方はもとより、豊後・日向方面にも行くことができる。

御潮井採りのルート

英彦山の御潮井採りの行事は、北坂本の集落から始まる。

英彦山神宮の宮司以下、神官、氏子総代らは、北坂本において出発の儀式を行い、午前9時ちょうどに法螺貝を吹きつつ参道を下りはじめる。

今ではほとんどのコースを「御料車」と呼ばれる自動車で往復するが、以前はもちろん全行程が徒歩と荷馬車での往復であった。

彼らは春の訪れを告げる「山伏(やんぶし)さん」として、途中の村々で歓迎を受けながら行橋の海岸に向けて下っていく。

沓尾海岸の姥ヶ懐に着くと、青竹でつくられた「潮井筒」に潮水を汲む儀式がおこなわれる。

その儀式は秘儀とされ、「見たものは目がつぶれる」という。

潮水の入った「潮井筒」は、英彦山に持ち帰り、山内を清める儀式に用いられる。

そのルートは、次のとおりとなっている。

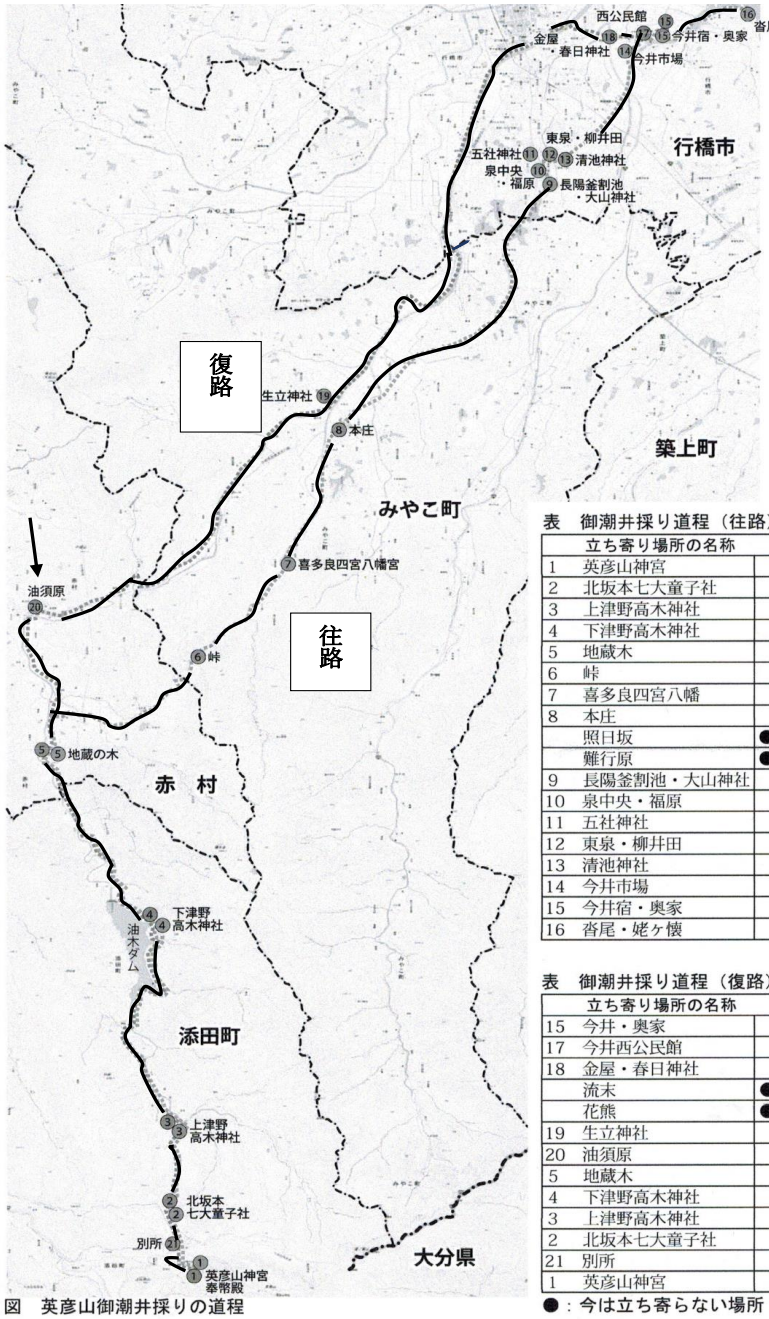


図　英彦山御潮井採りの道程

表　御潮井採り道程（往路）

立ち寄り場所の名称			所在地
1	英彦山神宮		添田町
2	北坂本七大童子社		
3	上津野高木神社		
4	下津野高木神社		
5	地蔵木		赤村
6	峠		みやこ町
7	喜多良四宮八幡		
8	本庄		
	照日坂	●	
	難行原	●	
9	長陽釜割池・大山神社		行橋市
10	泉中央・福原		
11	五社神社		
12	東泉・柳井田		
13	清池神社		
14	今井市場		
15	今井宿・奥家		
16	沓尾・姥ヶ懐		

表　御潮井採り道程（復路）

立ち寄り場所の名称			所在地
15	今井・奥家		行橋市
17	今井西公民館		
18	金屋・春日神社		
	流末	●	
	花熊	●	みやこ町
19	生立神社		
20	油須原		赤村
5	地蔵木		
4	下津野高木神社		添田町
3	上津野高木神社		
2	北坂本七大童子社		
21	別所		
1	英彦山神宮		

●：今は立ち寄らない場所

往路と復路は若干異なるが、基本的に今川に沿った道である。

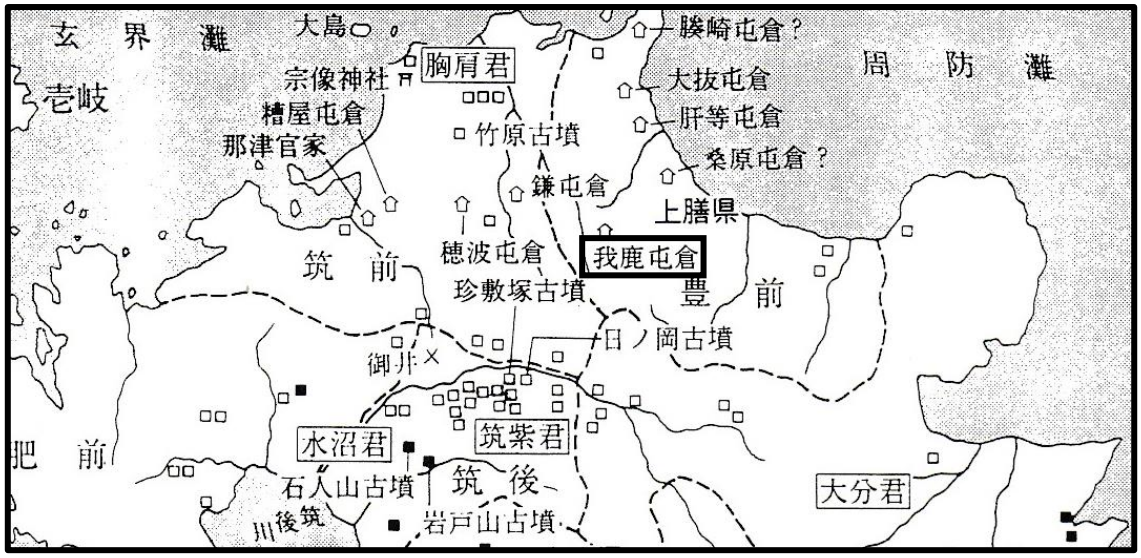
今川は犀川(さいかわ)とも呼ばれ、英彦山山地の鷹ノ巣山(979 メートル)を源に田川郡添田町・赤村から京都郡のみやこ町(旧犀川町・豊津町)を流れ、行橋市で周防灘に流れ込む流路延長31.63 キロの二級河川である。

御潮井採りの出発地点は、英彦山神宮の奉幣殿である。そして、前述したとおり、北坂本で出発の儀式をおこない、山を下っていくが、次の地点は上津野集落の高木神社と下津野集落の高木神社である。高木神社といえば、タカミムスビ(高皇産霊尊)を祭る神社である。天忍穂耳命と結婚した万幡豊秋津師比売命の父に当たる。英彦山を守護するような位置に何ゆえ高木神社が祭られているのか――このことについては、先のほうで詳しく述べたい。

赤村の油須原

このルートで注目すべき地点の一つは、田川郡赤村の油須原である。

『日本書紀』安閑天皇二年(535)に食糧などの保管のため豊の国に 5 か所の屯倉(みやけ・朝廷直轄地)が置かれたが、その一つが我鹿(あか)の屯倉である。



『太宰管内誌』【伊藤常足・天保 12(日本歴史地理学会・明治 41 復刻版)】には、

「山中なれども田地広き処なり」

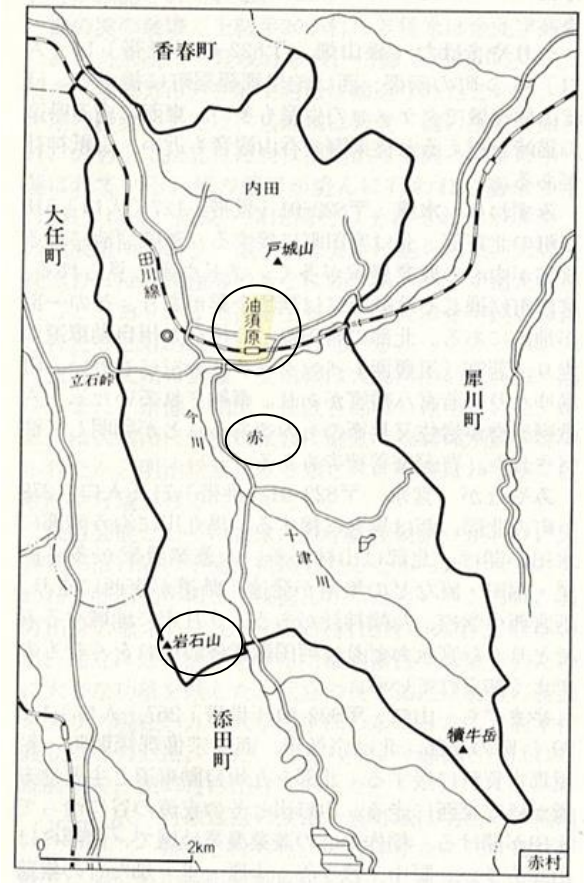
と書かれている。

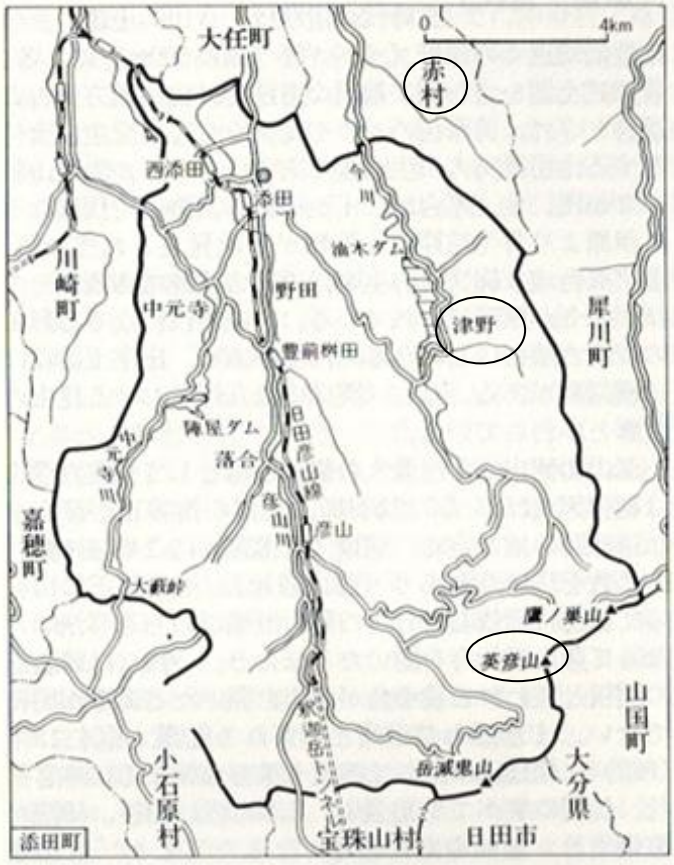
我鹿＝赤という地名は、天忍穂耳命に由来する。

天忍穂耳命は、正式には正哉吾勝勝速日天忍穂耳尊などと表記され、「吾勝(あかつ)」と「勝速日(かつはやひ)」が付加されている。

正哉吾勝勝速日天忍穂耳尊	『日本書紀』第六段本文、第九段本文、第一の一書、第八の一書、『先代旧事本紀』
正哉吾勝勝速日天忍骨尊	『日本書紀』第六段第一の一書、第二の一書
正勝吾勝勝速日天之忍穂耳命	『古事記』
正哉吾勝勝速天穂別尊	『先代旧事本紀』

その意味を伝える文献は見当たらないが、「まさかつあかつ」は「正しく勝った、私が勝った」、「かつはやひ」は「すばやく勝った」を意味する飾り言葉のようにもおもえるが、もちろん確証はない。





天忍穂耳命＝吾勝命(あかつのみこと)は、まず「吾勝(あかつ)山」に天降ったという。

添田町と赤村の境にある「岩石(がんじゃく)山(454 メートル)」のことである。

このため、吾勝命が天降った岩石山の東麓は「吾勝野(あかつの)」と呼ばれたが、のちに南北に分割され、北部は「我鹿(阿柯)・あか」、南部は「津野・つの」と呼ばれたという（『赤村郷土史資料』)。

その後、天忍穂耳命は油須原に拠点を構えて、周辺を統治したという(『福岡県神社誌』大日本神祇会福岡県支部 昭 19)。

ちなみに、「赤」という漢字が用いられるようになったのは、貞観年間(859～877)ごろという(『赤村郷土史資料』)。

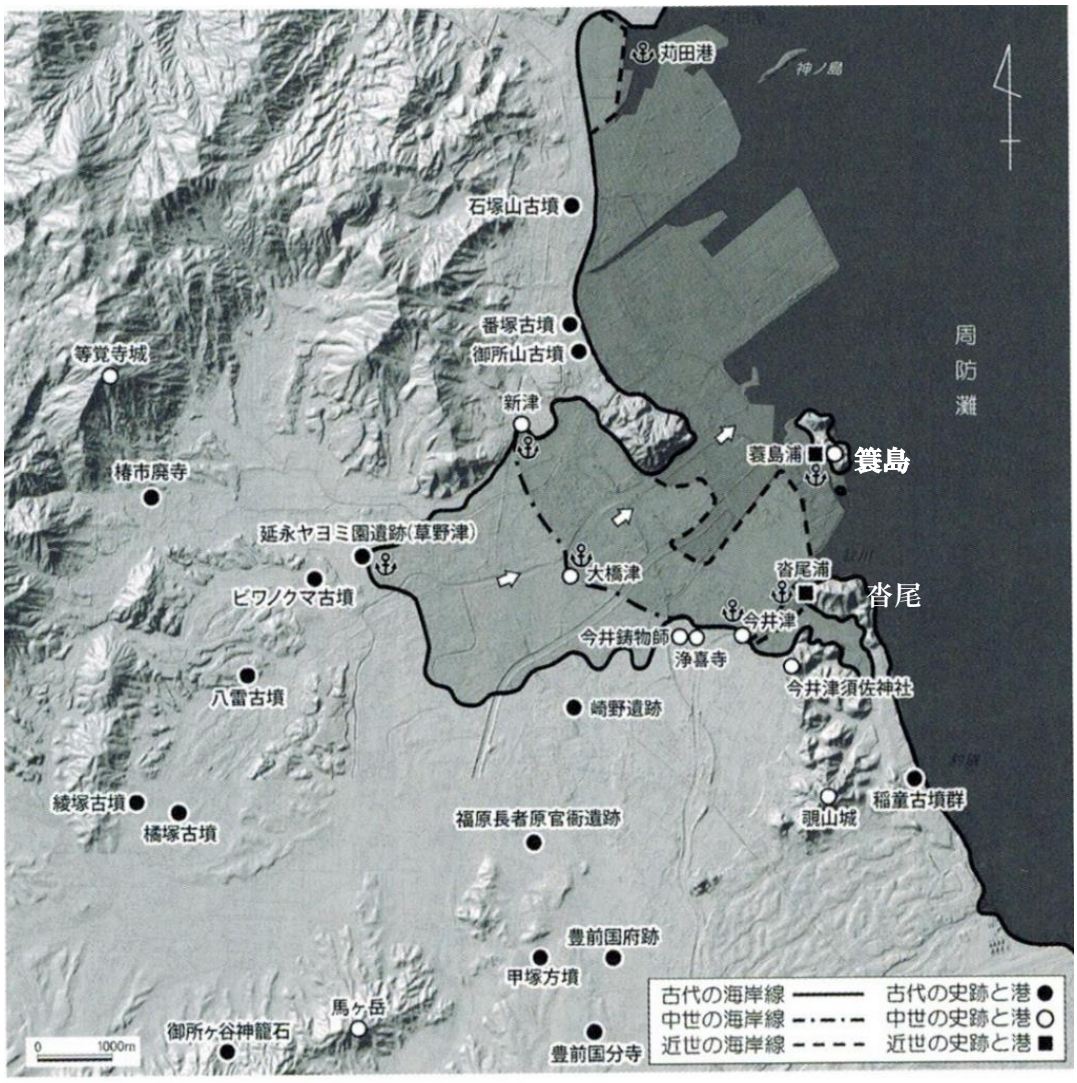
現在の赤村である。南部の津野は添田町に属している。

このように、【英彦山(添田町)→岩石山(添田町・赤村)→油須原(赤村)】という御潮井採りのルートは、天忍穂耳命の伝承とも重なっている。

京都平野

今川に沿って下っていくと京都(みやこ)平野に出る。

ただし、京都平野の現在の地形と弥生時代の地形は大きく異なっている。



港と海岸線の変遷（地形図は国土地理院「陰影起伏図」を使用）

周防灘のうち、豊前北部の沿岸海域は伝統的に豊前海と呼ばれるが、上図のとおり、京都平野のなかに豊前海が深く湾入しており、出入口には簑島(みのしま)が位置している。南部に位置する沓尾も、もとは島であった。

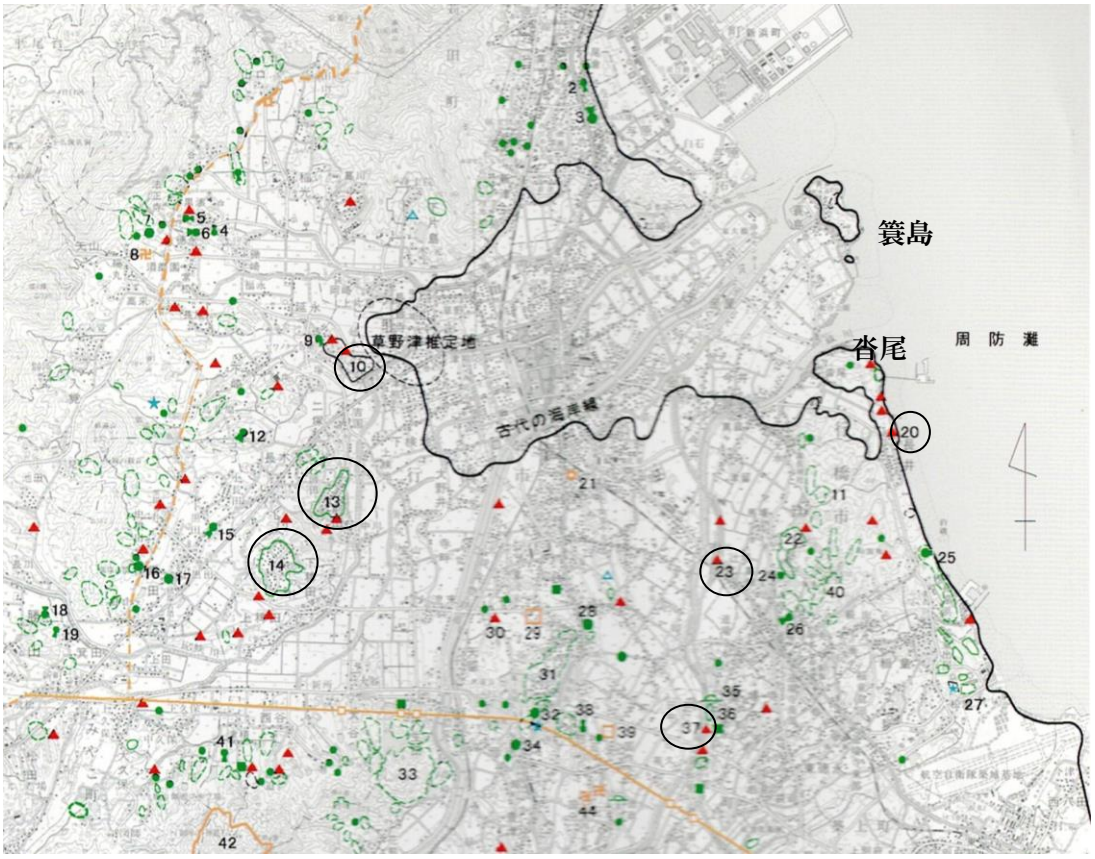
唐津市の呼子湾もおなじように湾を塞ぐように加部島が位置し、東シナ海の風波を防いでいる。

湾の出入り口を島が塞ぐ地形は、まさしく古代人が好む港である。

そして、湾を囲むように、弥生・古墳時代などの古代遺跡が密集している。

主な遺跡を紹介すれば、次のとおりである。

京都平野の主要な遺跡



★ 旧石器時代
△ 縄文時代
▲ 弥生時代
● 古墳
前方後円墳
古墳・横穴墓群
■ 古墳時代集落
□ 奈良・平安時代
卍 古代寺院跡
窯跡
複合遺跡場など
駅路
駅路推定線

1. 石塚山古墳	2. 番塚古墳	3. 御所山古墳	4. 徳永夫婦塚古墳	5. 黒添メウト塚古墳	6. 徳永丸山古墳
7. 福丸古墳群	8. 椿市廃寺	9. ビワノクマ古墳	10. 延永ヤヨミ園遺跡	11. 元永イヅツリ古墳群	12. 八雷古墳
13. 前田山遺跡	14. 下稗田遺跡	15. 庄屋塚古墳	16. 鏡塚古墳	17. 橘塚古墳	18. 扇八幡古墳
19. 箕田丸山古墳	20. 長井遺跡	21. 崎野遺跡	22. 代遺跡	23. 辻垣遺跡	24. 馬場代古墳群
25. 稲童古墳群	26. 隼人塚古墳	27. 渡築紫古墳群	28. ヒメコ塚古墳	29. 福原長者原官衙遺跡	30. 矢留堂ノ前遺跡
31. 竹並遺跡	32. 甲塚方墳	33. 天生田大将軍横穴群	34. 彦徳甲塚古墳	35. 居屋敷窯跡	36. 鋤先遺跡
37. 徳永川ノ上遺跡	38. 惣社古墳	39. 豊前国府跡	40. 覆山城跡	41. 片峰1号墳	42. 御所ヶ谷神籠石
43. 木山廃寺	44. 豊前国分寺跡	45. 船迫窯跡群	46. 上坂廃寺	47. 三ッ塚古墳群	48. 節丸西遺跡

長井遺跡(№20)

行橋平野の弥生時代の遺跡に、長井遺跡(行橋市大字長井字陣山)がある。

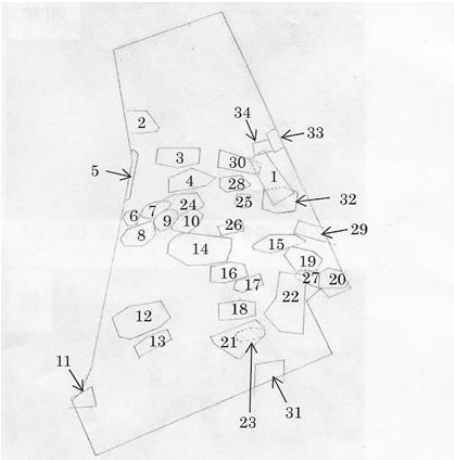
前述した姥ヶ懐からは、南方わずか 1 キロの位置にある。

標高 5 メートルの砂丘上に位置する大規模な墳墓遺跡で、昭和 34 年に砂利採取工事を聞きつけた郷土史家の定村責二氏が現場に駆けつけて確認したところ、約 900 ㎡の範囲から 500 基以上の箱式石棺が出土したという。このときの状況や出土品などは、小田富士夫氏によって『九州考古学』25・26 号(1965)で報告されたが、墓に供えられた弥生前期の多くの小壺など 100 点以上の

土器類が採取されるとともに、稲作の伝搬を示す夜臼式土器と板付Ⅰ式土器が確認された。周防灘・豊前海沿岸部における初めての発見でもあった。

このように弥生時代前期～中期の遺跡と考えられていたが、令和元年度の長井浜公園進入道路整備に伴い、昭和 34 年調査区域の南側を発掘調査したところ、方形周溝墓のほか弥生時代後期～古墳時代初期の土器類なども確認され、従来考えられていたよりも長期にわたる遺跡であることが確認された。

長井遺跡全景（西から）



長井遺跡における石棺の分布図

辻垣遺跡(№23)

辻垣遺跡祓川右岸に広がる標高 10～13 メートルの微高地に立地する遺跡で、昭和 62 年(1987)国道 10 号線行橋バイパス建設に伴い調査が行われ、行橋平野における初期の稲作集落であることが明らかになった。最初に調査されたのが辻垣ヲサマル遺跡(行橋市大字辻垣字ヲサマル)で、次に調査されたのは辻垣畠田・長通遺跡(行橋市大字辻垣字畠田、字長通)である。『平成 29 年度行橋市資料館特別展　邪馬台国時代の豊』(行橋市教育委員会)よれば、次のとおり。

辻垣ヲサマル遺跡（行橋市大字辻垣字ヲサマル）

辻垣ヲサマル遺跡は、祓川右岸下流域の微高地にあった。標高は 11 ～ 12mである。主な遺構は、大溝(流路)を含む多数の溝、円形周溝、柱穴群などである。遺跡から出土した遺物には、農耕に伴う石庖丁・石斧・磨石・砥石などの石器類や三叉鍬の木器、サヌカイト製の石匙、石鏃(安山岩・黒曜石)、蛇紋岩製の扁平磨製石斧片などがある。また、時代は新しくなるが、水田にひく水の祭祀に使用したと思われる土製模造鏡、ガラス小玉などの祭祀遺物も発掘されている。

円形周溝は、ほかに例を見ない遺構である。規模は直径約 30mを測る。溝の断面形は「U」字形となり、溝幅は約 50 ㎝、深さは約 30 ㎝である。出土遺物は、石器(石鏃・石庖丁・石剣)、土器(甕・壺・鉢・高杯など)で、その時期は、稲作がこの地に入ってきた最初の時期から少し遅れた弥生時代前期後半である。〔文献 5〕

辻垣ヲサマル遺跡の遠景(南側から)

辻垣畠田・長通遺跡
(行橋市大字辻垣字畠田、字長通)

辻垣ヲサマル遺跡の北側に位置する遺跡で、微高地の先端側に位置しているために、辻垣ヲサマル遺跡よりも若干標高が低く、標高 10.7 ～ 11.1mである。

弥生時代前期・弥生時代後期・古墳時代前期の 3 時期にかけて断続的に営まれている。このうち、弥生時代前期の特徴は、集落の一部に東西約 35m、南北約 180mの範囲を環濠で囲む部分があることと、瀬戸内の影響が強い土器が出土していることである。

辻垣畠田・長通遺跡は初期農耕の遺跡としてだけではなく、海に向かって開かれた遺跡としての特異性を示している。〔文献 6〕

辻垣畠田・長通遺跡の遠景(北側から)

下稗田遺跡(№14)

下稗田遺跡(行橋市大字下稗田)は、長峡川左岸の標高30m前後の丘陵地に広がる大規模な集落遺跡である。昭和54年(1979)～昭和 60 年(1985)に発掘調査が行われ、弥生時代前期・中期・後期～古墳時代前期の竪穴住居跡や貯蔵穴、墳墓、祭祀遺構などが確認された。

下稗田遺跡の時期別出土遺跡

時期	住居跡	貯蔵穴	墳墓
前期中葉	8	109	―
前期後葉	93	945	石棺6 土壙墓14
中期前葉	41	300	石蓋土壙墓21
中期中葉	22	96	土器棺墓106
中期後葉	8	12	祭祀遺構27
後期～古墳初期	77	―	方形周溝墓1、箱式石棺7、石蓋土壙墓2、土壙墓1、祭祀遺構1

(渡辺正気著『日本の古代遺跡34・福岡県』保育社 一九八七より)一部改変

図 下稗田遺跡Ⅰ地点の全景(北側から)

下稗田遺跡(行橋市大字下稗田字東郷ほか)

行橋市西南部にある稗田丘陵にある遺跡で、昭和 54 ～ 60 年(1979 ～ 1985)に宅地造成工事のために発掘された。長峡川の左岸に連なる標高 30m前後の独立丘陵の一部を占める大規模な遺跡である。丘陵は、尾根と谷が入り組み、尾根部には弥生時代前期中頃～中期後半の集落跡と弥生時代前期末～中期後半の墳墓群、谷部には弥生時代前期中頃の貯木施設などがある。集落の調査では、100 軒を超す竪穴住居跡や 1600 基余りの貯蔵穴が調査された。弥生時代前期中頃以後、生活の舞台が丘陵部へ進出して、土地開発が活発になった様子がうかがえる。

特に下稗田遺跡Ⅰ地点と命名された大きな丘陵部では、継続して集落が営まれ続けて、周囲に小集落が次々に誕生する。そのなかで、Ⅰ地点は母村としての役割を担った。また、出土した石器の量や丘陵下の木器製作途中の遺物を見ても、周囲の集落を含んだ農業共同体の中心的な遺跡であったと考えられる。

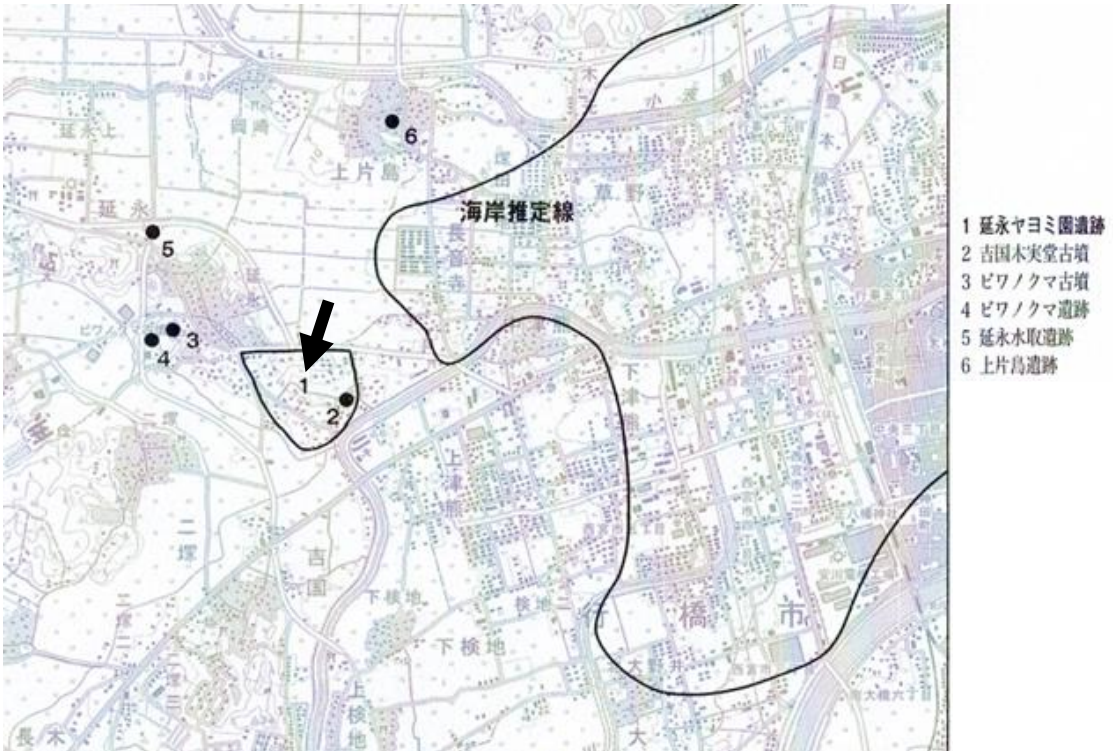
『邪馬台国時代の豊』(行橋市教育委員会)より

延永ヤヨミ園遺跡(№10)

延永(のぶなが)ヤヨミ園遺跡(行橋市大字延永・吉国)は標高10m前後の丘陵地にあり、弥生時代から奈良・平安時代から中世までの複合的な遺跡で、弥生終末から古墳時代の竪穴住居跡400軒以上が見つかっている。

農業集落というより、食料の管理や流通などを担った商業集落であったとみられているが、全体

のおよそ 3 割が邪馬台国の時代に重なるといわれている。



とりわけ、遺跡のⅢ-C 区と呼ばれる南側付近から木造の導水施設――木樋が見つかり、大きく報道された。

2015/3/1 産経新聞
福岡県の九州歴史資料館は16日、祭祀（さいし）で使った「導水施設」の一部とみられる木樋（もくひ）が平成23年に同県行橋市の延永（のぶなが）ヤヨミ園遺跡で見つかり、その後の調査で古墳時代前期（3世紀中ごろ～4世紀中ごろ）の国内最古級と判明したと発表した。同種の木樋は近畿を中心に約10件見つかっており、最古とされた奈良県桜井市の纒向（まきむく）遺跡の木樋とほぼ同時期とみられる。
資料館によると、木樋は長さ約4メートル、幅約35～70センチ、厚さ約4～10センチで23年3月に九州で初めて出土した。傾斜の上部から下部に水を流す構造で、上部の端に上下に並んだ2つのくりぬき部分があり、ここに不純物を沈殿させ、浄化した水を神にささげたり、遺体を洗ったりする儀礼に使った可能性があるという。
周囲には柱の一部とみられるくいも見つかり、資料館は導水施設が建物の中にあったとみている。資料館の城門義広主任技師は「導水施設を使う祭祀が早い段階で大和政権から伝わったことを示し、政権が北部九州を重要視したことが分かる発見だ」と話している。

この新聞記事は炭素 14 年代測定法に基づく近畿編年に基づいているため、古墳時代が従来の土器編年に基づく古典的な年代よりも約 100 年古くなっている。したがって纒向遺跡で出土した木樋とおなじく延永ヤヨミ園遺跡についても、国内再古級の木樋とされ、いずれも邪馬台国時代と

重なる可能性が高いとされている。

しかしながら、古典的な年代論でいえば、邪馬台国とは無関係の、大和朝廷成立後の 4 世紀以降の木樋ということになる。

毎日新聞も、「ヤマト政権発祥の地とされる奈良県の纒向遺跡で出土した国内最古の 3 世紀後半～4 世紀初頭のものとほぼ同時期で、近畿で始まった水の祭祀が極めて短期間に九州にも伝わっていたことになる。誕生したばかりのヤマト政権が延永ヤヨミ園遺跡一帯を九州支配の拠点としていたとみる識者もいる」と、見てきたような匿名の識者なるコメントを掲載している。

しかしながら、下表のとおり、石川・群馬～九州までの 13 か所から木樋が出土しているが、3 世紀まで遡るのは纒向遺跡と延永ヤヨミ園遺跡だけで、ほかの遺跡では 4～5 世紀が最も多い。

遺跡	所在	時期	形態	備考
纒向遺跡	奈良	3世紀後半～ 4世紀初頭	木樋 井泉	組合式
延永ヤヨミ園遺跡	**福岡**	**3世紀中頃～ 4世紀中頃**	**木樋**	**2槽**
服部遺跡	滋賀	4世紀	木樋	
浅後谷南遺跡	京都	4世紀前半	木樋	
畝田遺跡	石川	4世紀前半	木樋	
千代・能美遺跡	石川	4世紀前半	木樋	
磯野北遺跡	奈良	4世紀前半	木樋	
瓦谷遺跡	京都	4世紀前半～中葉	木樋	2点
南郷大東遺跡	奈良	5世紀前半～中頃	木樋	
大柳生宮ノ前遺跡	奈良	5世紀中頃～ 6世紀中頃	木樋	
神並・西ノ辻遺跡	大阪	5世紀後半	木樋	2点
水衛遺跡	三重	6世紀	木樋	
三ッ寺Ⅰ遺跡	群馬	5世紀後半～ 6世紀初頭	導水	石敷

『九州歴史資料館展示解説シート 46 』によれば、

「木樋の年代を科学分析(放射性炭素年代測定)で調べた結果、3 世紀中頃～4 世紀中頃(約 1,750 年前～1,650 年前)」

とあり、ちょうど 100 年の推定幅が生じており、年輪年代法によって古い数値が出ている可能性が考えられる。基礎データが公表されたかどうか確認できないが、場合によっては情報開示を求める必要があるかもしれない。

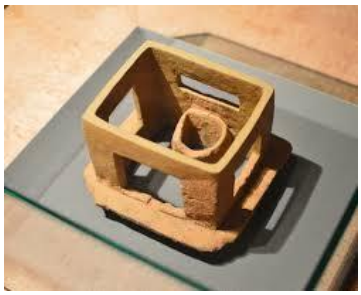
木樋は集落が広がる丘陵地の裾――斜面に作られており、そのまわりに柱が建ち並んでいることから、外から見えないような覆屋(おおいや)が建てられていたとみられている。建物周辺からは水源となる井戸なども見つかっている。木樋の上流部には 2 つの槽――くぼみが彫られており、上流から流れてきた水を 2 度ろ過し、下流へ清浄な水を流していたとされる。

なお、この覆屋(おおいや)に似た家型埴輪(囲型埴輪)の内部に木樋に似た埴輪が置かれた「木樋型埴輪(導水施設形埴輪)」も九州から関東まで出土している。

大園遺跡	大阪	4世紀末～ 5世紀初頭	埴輪	
野毛大塚古墳	東京	5世紀前半	石製	2槽
宝塚古墳	三重	5世紀前半	埴輪	
芝ヶ原古墳群	京都	5世紀前半	埴輪	
五条猫塚古墳	奈良	5世紀前半	埴輪	
ナガレ山古墳	奈良	5世紀前半	埴輪	
心合寺山古墳	大阪	5世紀前半	埴輪	
野中宮山古墳	大阪	5世紀前半	埴輪	2槽
行者塚古墳	兵庫	5世紀前半	埴輪	2槽
月の輪古墳	岡山	5世紀前半	埴輪	2槽
御塔山古墳	大分	5世紀前半	埴輪	2槽
狼塚古墳	大阪	5世紀中頃	埴輪	

5 世紀がほとんどで、前掲の表と合わせると、4～5 世紀ごろの導水施設をあらわしているのであろう。

ちなみに、宝塚古墳の家型埴輪(囲型埴輪)は下図のとおりである。



湧水　　導水

延永ヤヨミ園遺跡の導水施設の全景は次のとおり。

延永ヤヨミ園遺跡の導水施設（当館撮影）

延永ヤヨミ園遺跡の導水施設の写真をよくよく見ると、丘陵地の斜面に木樋を斜めに置いて、上部に槽(くぼみ・穴)を空け、水を下に流し落とす仕掛けになっている。

――何だ、これは。単なる水洗便所ではないのか！

寄生虫の卵が検出された遺跡もあるということから、延永ヤヨミ園遺跡についても寄生虫調査が行われたが未検出に終わったという。ただし、水が流れ下る下流域は調査対象外であったというから、あまり当てにはならない。

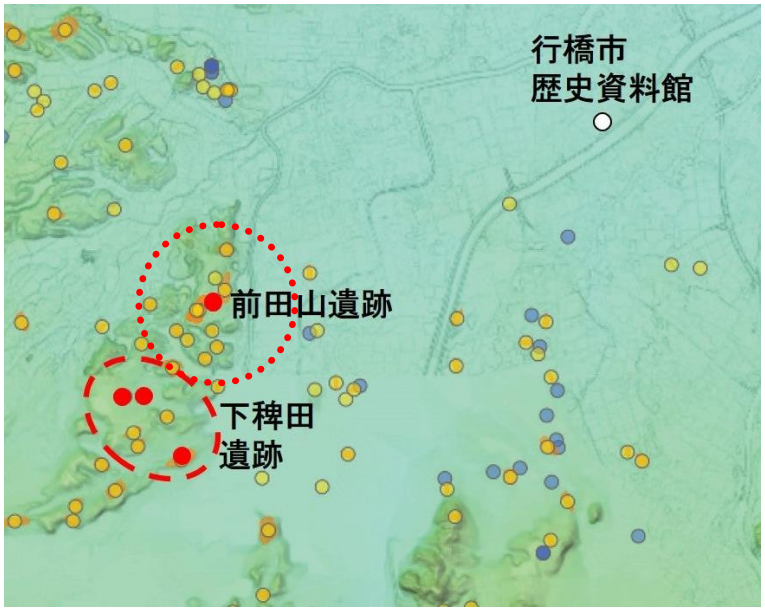
何らかの祭祀遺跡とみるのが通説的見解のようではあるが、トイレ説も提唱されているようであるので、今後の展開に期待したい。

それはともかくとして、纒向遺跡・延永ヤヨミ園遺跡の木樋は 4 世紀以降の導水施設であり、邪馬台国時代のあとの大和朝廷時代のものとみるのが妥当であろう。

前田山遺跡 (№13)

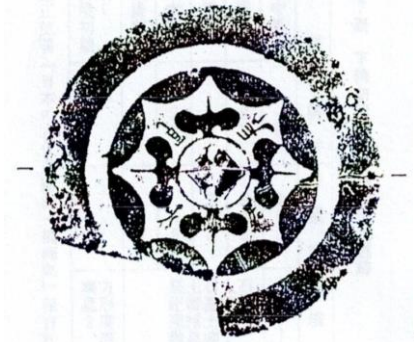
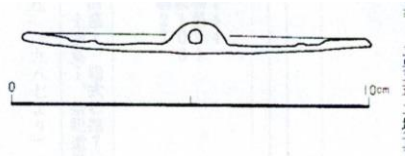
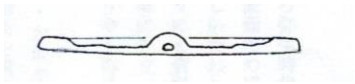
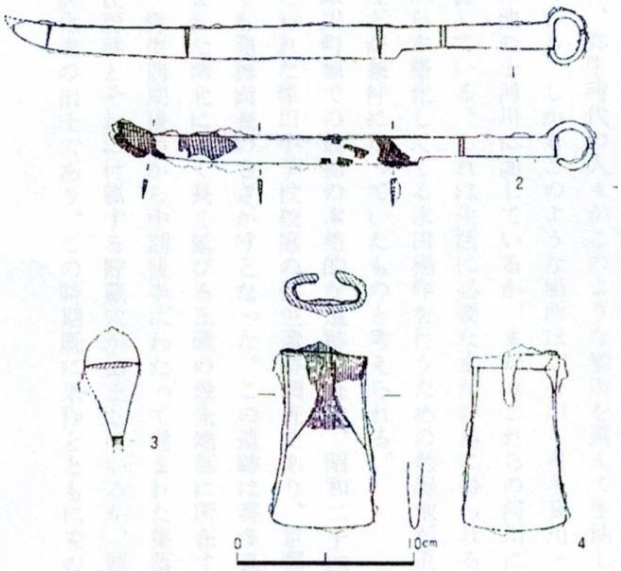
前田山遺跡 (行橋市前田・検地)は、京都平野のやや西寄りに島状に浮ぶ稗田丘陵の北側にある弥生時代から古墳時代にかけての大規模な遺跡である。同じ丘陵の南側に下稗田遺跡がある。

宅地造成に伴い、昭和 52 年(1977)～54 年(1979)にかけて発掘調査が行われた。

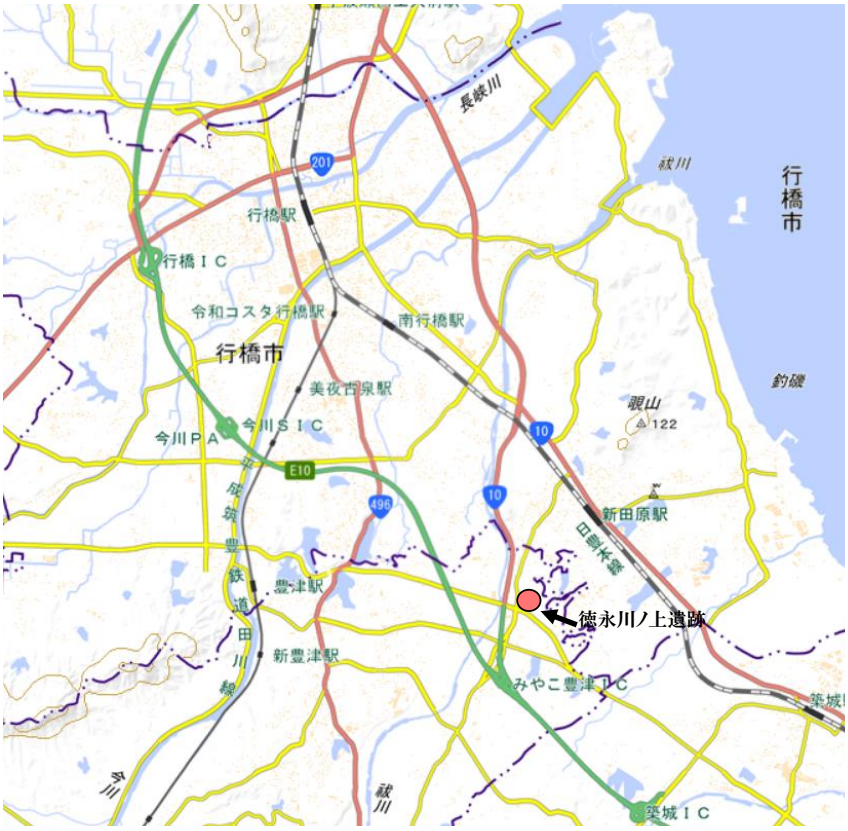


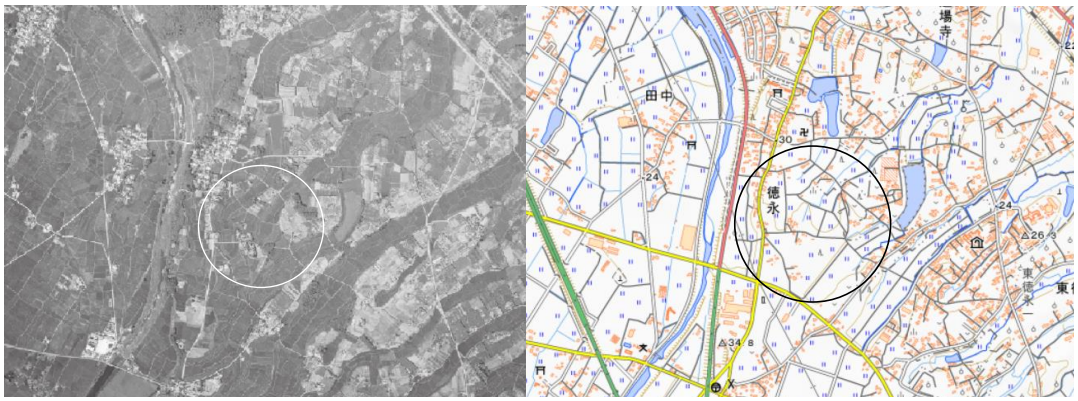
『前田山遺跡』(行橋市文化財調査報告書 6・1977)や『前田山遺跡』(行橋市文化財調査報告書 19・1987)によると、低丘陵上の南北に伸びる二つの丘のうち、一方は主として集落跡で、竪穴住居跡、袋状貯蔵穴と、幾らかの土壙墓や石蓋土壙墓が出土した。

もう一方の丘は墳墓群群で、土壙墓・石蓋土壙墓・土器蓋土壙墓・箱式石棺・カメ棺墓が出土した。そして、袋状竪穴の一つから石製把頭飾が出土し、箱式石棺から中国鏡(内行花文鏡)、石蓋土壙墓から国産鏡(小型仿製鏡)の 2 面の青銅鏡が出土した。

中国鏡 **(内行花文鏡)**	第27図　前田山遺跡9号石棺墓出土の内行花文鏡  1978年発掘 伴出、鉄製素環刀(319mm)  **「長宜子君」銘・蝙紐座内行花文鏡(一部欠損)9.85cm** **3世紀後半～4世紀中葉(西晋の時代か)**
国産鏡 **(小型仿製鏡)**	第28図　前田山遺跡6号石蓋土壙墓出土の小型仿製鏡  **内行花文鏡(日光銘鏡系) 7.72 cm**
鉄製品	第29図　前田山遺跡出土鉄製品  鉄製素環刀 (319mm) 1、2　素環刀　3　鉄鏃　4　鉄斧 (「前田山遺跡」行橋市文化財調査報告書第19集　1987より)

徳永川ノ上遺跡(No.37)





徳永川ノ上遺跡(京都郡みやこ町徳永)は、祓川右岸の丘陵上に位置している。

京都平野の東側には低丘陵群があり、それにさえぎられて祓川が北に流れを変える地域が徳永である。遺跡の標高は 24～30 メートルで、水田地帯との標高差は 8 メートルもある。

祓川に沿った南北に細長い丘陵で、南端の丘陵基部に「神手遺跡」、北側に「鋤先遺跡」や「居屋敷遺跡」など、徳永遺跡群に含まれる重要遺跡が祓川に沿って連なっている。

国道 10 号線バイパス工事に伴い、昭和 63～平成 2 年度まで調査が行われた。

そして、E 地区 4 号墳丘墓の箱式石棺墓から、「長宜子孫・位至三公」銘・蝙蝠座内行花紋鏡が出土した。

徳永川ノ上遺跡

中国鏡(内行花文鏡)	素環頭刀
 「長宜子孫・位至三公」銘・蝙蝠座内行花文鏡 (9.85 cm) 3 世紀後半～4 世紀中葉(西晋の時代か)	 (24. 0 cm)

前田山遺跡と徳永川ノ上遺跡から、中国製の内行花文鏡が出土したことはきわめて重大である。

考古学者で、中国社会科学院考古学研究所の元所長の徐苹芳氏は、『三角縁神獣鏡の謎』(角川書店・1985)のなかで、

「考古学的には、魏および西晋の時代、中国の北方で流行した銅鏡は明らかに、方格規矩鏡・内行花文鏡・獣首鏡、夔鳳(きほう)鏡・盤竜鏡・双頭竜鳳文鏡・位至三公鏡・鳥文鏡などです。

従って、邪馬台国が魏と西晋から獲得した銅鏡は、いま挙げた一連の銅鏡の範囲を越えるものではなかったと言えます。とりわけ方格規矩鏡・内行花文鏡・夔鳳鏡・獣首鏡・位至三公鏡、以上の五種類のものである可能性が強いのです」

と述べている。

そして、『洛陽衡山路西晋墓発掘簡報』(『中原文物』1987 年第 3 期)は、洛陽衡山路(こうざんろ)西晋墓を、西晋(265～316)早期のものとする。

そして、この西晋墓からは、位至三公鏡と蝙蝠鈕座内行花文鏡が混在して出土している。

ということは、この二つの鏡は同時期のものである。

位至三公鏡(8.8 cm)

蝙蝠鈕座内行花文鏡(12.9 cm)

前田山遺跡から出土した蝙紐座内行花文鏡と徳永川ノ上遺跡から出土した「長宜子孫・位至三公」銘・蝙蝠座内行花文鏡が西晋時代（265～316）の洛陽でつくられた中国鏡であるとすれば、266 年に台与が派遣した使者たちが日本に持ち帰った鏡の可能性がきわめて高くなる。

さらにいえば、1979 年に平遺跡(京都郡みやこ町上坂字平 333)の箱式石棺墓から夔鳳(きほう)鏡(16.0 cm)が出土したといわれるが、所在不明になっている。

夔鳳鏡もまた魏・晋の時代に盛行しており、京都平野の他の 2 面とおなじ時期に製造・搬入された可能性があろう。

いずれにしても、下表のとおり、蝙紐座内行花文鏡は福岡県出土が最多であり、台与が拠点とした後期邪馬台国の拠点的地域が福岡県であったことを示している。下表からは漏れているが、徳永川ノ上遺跡からもう 1 面出土している。

静岡・群馬など東海・関東地域などから出土しているのは、九州出身の氏族――たとえば尾張・物部氏などの進出に伴い伝世されたものであろう。

わが国出土の「蝙蝠紐座内行花文鏡」

番号	出土県名	遺跡名	所在地	およその時代	面径	鏡	伴出遺物・出土遺構
1	福岡県	老司古墳第３号石室	福岡市南区老司571（「君宜高官」銘）	古墳時代、４世紀末葉	12.8	７期以降	前方後円墳（90m 横穴式石室）、全長75m の前方後円墳、石室
2	福岡県	野方中原遺跡３号石棺墓	福岡市西区野方字中原	古墳時代前期初頭	復元径10.6	６期	３号石棺墓
3	福岡県	前田山遺跡	行橋市前田・検地（「長宜子君」銘）	弥生後期後半～終末	9.85	６期	１区９号、箱式石棺墓（弥生後半～終末）
4	福岡県	三雲寺ロ遺跡２号石棺墓	前原市大字三雲字寺ロ11-17（「長宜子孫」銘）	弥生後期終末	15.5	６期	２号石棺墓
5	福岡県	久原遺跡Ⅲ-4号墳	宗像市大字久原ほか（「君？高官」銘）	古墳時代４期	12.8	６期	直径約18m の円墳
6	福岡県	潜塚古墳	大牟田市黄金町1-469（「長宜子孫」銘）	古墳時代、５世紀中葉	14	６期	円墳
7	福岡県	御笠地区遺跡	筑紫野市大座阿志岐（「長宜子孫」銘）	弥生終末	14	６期	
8	福岡県	上大隈平塚古墳	柏屋郡柏屋町大字大隈（「長宜子孫」銘）	古墳１期～３期	復元13.6	６期	墳丘径17～18m、高さ1.5m の円墳状
9	福岡県	神領２号墳	柏屋郡宇美町字西明寺（「長宜子孫」銘）	古墳４期	11.6	６期	直径26m、高さ3.5～4ｍほどの円墳
10	福岡県	谷頭遺跡	飯塚市（綱田）西佐与（「長宜子孫」銘）	弥生時代	12.4	６期	箱式石棺墓
11	宮崎県	広島古墳群	宮崎市広島（「君宜子孫」銘）		13.3	６期	
12	山口県	朝田墳墓群３号方形台状墓	山口市大字朝田第11地区（鏡片「長宜子孫」銘）	弥生時代後期後半	復元10.2	６期	弥生から古墳の墳墓群、主体部は箱式石棺墓の形態を強く残した異形の竪穴式石室
13	島根県	岡田山１号墳	松江市大草町字岡田884-1ほか（「長宜子孫」銘）	古墳時代10期、６世紀後半	10.48	６期	小規模前方後円墳（竪穴式石室）（全長約21.5m）、銀象嵌銘大刀、円筒Ｖ式
14	島根県	――	松江市大庭町大字有（「長生宜子」銘）	――	12.88		
15	広島県	石鎚山第２号古墳	福山市加茂町上加茂（「？宜？？」銘鏡片）	古墳時代２期	12.8	６期	全長16m の円墳
16	愛媛県	東（春）宮山古墳	四国中央市寒鳥町東（春）宮山（「長宜子孫」銘）	古墳時代、６世紀前半	9.6以上		円墳（横穴式石室）
17	香川県	猫塚古墳	高松市鶴市町御殿37（石清尾山古墳群）	古墳時代、４世紀末～５世紀中葉	14	６期	竪穴式石室５基～９基をもつ積石塚の双方中円墳
18	兵庫県	白鷺山石棺墓	たつの市揖野町日山	弥生後期	10.2（復元）	６期	２基の石棺からなる墳墓
19	兵庫県	東求女塚古墳	神戸市東灘区住吉富町１丁目（九花文、推定蝙蝠鈕座）｝２面出土	古墳時代３期	17.2	６期	全長約80m
20	兵庫県	東求女塚古墳	神戸市東灘区住吉富町１丁目（推定蝙蝠鈕座）｝２面出土	古墳時代３期	16.4	６期	全長約80m
21	大阪府	加美遺跡	大阪市加美東６丁目（破片）（「長？？？」銘）	弥生時代後期末～古墳時代前期	復元12		方形周溝墓
22	和歌山県	円満寺古墳	有田市宮原町東（「長生宜子」銘）	古墳時代	17.4	６期	
23	京都府	美納山王塚古墳	八幡市美納山（「君宜高官」銘）	古墳時代６期	11.5	６期	
24	岐阜県	御撮（みんなり）神社古墳	可児市広見（「長宜子孫」銘）	古墳時代			円墳（仿製内行花文鏡）
25	静岡県	銚子塚10号墳	磐田市寺谷（「？？子？」銘）		12.0	６期	不明、鋳造
26	群馬県	軍配山古墳	佐波郡玉村町角淵	古墳時代、４世紀後半頃			円墳

（「およその時代」欄の世紀別の推定は、『日本古墳大辞典』（東京堂出版刊）による）

徐苹芳氏はまた、『三角縁神獣鏡の謎』(角川書店・1985)のなかで、「至位三公鏡は、魏の時代(220～265)に北方地域で新しく起こったものでして、西晋時代(265～316)に大層流行しましたが、呉と西晋時代の南方においては、さほど流行してはいなかったのです。日本で出土する位至三公鏡は、その型式と文様からして、魏と西晋時代に北方で流行した位至三公鏡と同じですから、これは魏と西晋の時代に中国の北方からしか輸入できなかったものと考えられます」と述べられている。

わが国出土の「位至三公鏡」

番号	出土県名	遺跡名	所在地	名称	およその時代	面径	鏡式	伴出遺物・出土遺構
1	福岡県	岩屋遺跡	北九州市若松区大字有毛、岩屋(鏡片)	「位至三公鏡」	弥生時代	9.9	6期	
2	福岡県	鋤崎古墳	福岡市西区今宿青木字鋤崎	「位至三公鏡」	古墳4期	11.8	6期	全長62mの前方後円墳、初期横穴式石室
3	福岡県	正恵古墳群	前原市大字井原(双頭竜文鏡)	「位至三公鏡」		9.8		
4	福岡県	鷺田山遺跡	筑紫野市武蔵	「位至三公鏡」				
5	福岡県	犀川町山鹿2号石棺墓	みやこ町(犀川)山鹿字石ケ坪茶園	「位至三公鏡」			6期	
6	福岡県		糟屋郡粕屋町酒殿	「位至三公鏡」				
7	福岡県		(伝)福岡市	「位至三公鏡」	古墳期	8.3		
8	佐賀県	志波屋六本松古墳群 包含層	神埼市大字志波屋字六本松	「位至三公鏡」(破片)	不明	復元9.6、約1/2欠損	6期	
9	佐賀県	志波屋六本松古墳群 包含層	神埼市大字志波屋字六本松	「位至三公鏡」(破鏡)	不明	復元9.2、穿穴1あり	6期	
10	佐賀県	町南遺跡SB103竪穴住居跡	みやき町(中原)大字原古賀字町南、三本松	「位至三公鏡」(破鏡)	弥生時代終末	復元8.2	6期	環濠集落
11	佐賀県	男女神社西南	佐賀市(大和)久留間横馬場	「位至三公鏡」		不明		
12	佐賀県	谷口古墳	唐津市(浜玉)大字谷口字立中876	「位至三公鏡」(双獸鏡)	古墳4期	8.1(8.2)	6期	全長約77mの前方後円墳、竪穴系横口式石室
13	大分県	臼塚古墳	臼杵市大字臼田字林、西平	「位至三公鏡」(双竜鏡)	古墳中期(5世紀)	9.5		舟形石棺内副葬品
14	香川県	是行谷古墳群(土窟古墳)	さぬき市(長尾)大字東字是行谷	「位至三公鏡」	古墳時代?	約10	6期	
15	山口県	赤妻古墳(丸山古墳)	山口市下字野令赤妻(山口市赤妻町)	「位至三公鏡」	古墳4期	8.8	6期	2基の箱式石棺と1基の舟形石棺
16	島根県	玉造築山古墳	松江市(玉湯)玉造	「位至三公鏡」(双竜鏡)	古墳6～8期	8(8.3)	7期	舟形石棺2基
17	岡山県	随庵古墳	総社市西阿曽	「位至三公鏡」	古墳6期	9.8	7期	全長約40mの帆立貝式古墳、竪穴式石室
18	大阪府	カトンボ山古墳	堺市百舌鳥赤畑町5	「位至三公鏡」	古墳時代中期	8.1	7-1期	直径50mの円墳
19	大阪府	塔塚古墳(堺塔塚古墳)	堺市浜寺本町	「位至三公鏡」	古墳時代後期		7-1期	一辺45mの方形墳、初期形横穴式石室
20	大阪府	高月古墳(堺高月2号墳)	堺市浜寺船尾町	「位至三公鏡」	古墳時代後期	8.4	7-1期	直径17mの円墳
21	大阪府	大鳳郡伝出土	堺市(旧大鳳郡)	「位至三公鏡」			7-1期	
22	大阪府	大鳥塚古墳	藤井寺市古室2丁目	「位至三公鏡」		8.2		粘土槨? 木棺?
23	大阪府		旧大阪(摂津・河内・和泉国)	「位至三公鏡」		不明		
24	三重県	筒野1号墳	松阪市(嬉野)大字一志字筒野	「位至三公鏡」(双竜鏡・変形獸首鏡)	古墳時代2期	13.6		粘土槨
25	神奈川県		神奈川県内(東京国立博物館蔵)	「位至三公鏡」(双竜鏡)		9.3		
26			九州大学玉泉館蔵鏡	「位至三公鏡」		10		
27			京都大学文学部蔵鏡四二〇七					
28			(伝)奈良県山辺郡都祁村出土鏡					
29			小倉文化財団蔵鏡(「君宜」「高官」銘)					

この表からも、徳永川ノ上遺跡の 1 面が漏れているが、いずれにしても福岡県が最多であり、これまた後期邪馬台国の拠点的地域が福岡県であったことを示している。

この鏡の問題については、田川郡やほかの地域との関連もあるので、先の方で総括的に述べたいとおもう。

(以下、つづく)